6月上旬ロードショー

有楽町 日劇前 ニュー東宝 シネマ2 (571) 1947

■傷ついた青春をつきぬける清冽な愛！

誰もいないふたりだけの森で、社会から疎外された男と自由を求める若い娘とがひっそりと生活する。若者は精神病院から脱走した鋭敏な感性の持ち主。彼の暗誦する古典戯曲の数々は彼女に〝人間の自由〟を感じさせる夢幻の世界だ。

ふたりの出逢いがあまりにも衝撃的であったために、若い娘はおののく。彼女は誘拐されたのだ。始めのうちはただ彼から逃れることだけで精一杯であったが、だんだん彼の心に気づいてゆく。彼の不気味さと繊細さが交錯する心の中に、彼女がいままでに出逢ったことのない〈優しさ〉を感じたのであった。

うっ蒼と茂る森の中に建つ山小屋は、外界から遮断されたふたりだけの隠れ家――

この映画は夢を求めて報いられることのなかった恋人たちの物語である。

■全米が泣いた！本年最高のラブ・ストーリー

この「ふたりだけの森」が上映さるや、全米は涙と感動につつまれ、「ある愛の詩」以来の愛の名作として、高く評価された。特にラストの「泣くんじゃない。目をつぶって、星を見ているんだよ」というセリフは、若い恋人たちの流行語となっているほどだ。

出演は、映画史上に残る大ヒットを記録した「エクソシスト」の名子役リンダ・ブレアと、「ゴッドファーザー」のフランシス・F・コッポラ監督の新作に起用されて、完成前から超大型新人の呼び声高いマーティン・シーンが初共演。このふたりのほかに、古くからバイプレイヤーとして活躍するジニー・クーパーやバート・レムセン、リー・デブローなど。若い主演者を盛りたてて、渋い演技を展開している。

ふたりだけの森

SWEET HOSTAGE

IOW カラー作品／アメリカ映画
東宝東和提供

■ドリスとハッチの衝撃的な出逢い

ニュー・メキシコの片田舎に、単調な生活に疲れた若い娘がいた。口やかましいだけの父と無関心の母親とのわびしい生活。ひとり娘の彼女には養鶏場での親子三人の毎日に、つくづくいや気がさしていた。彼女の名はドリス・メイ・ウィザース。彼女は本当の恋がしたかったのだ。こんな片田舎から早く抜け出ることをいつも考えていた。

同じ頃、東部の精神病院から逃げ出した若者がいた。彼の名はハッチ。彼には夢があった。その夢を実現させるための逃走だ――。

両親の喧嘩にいたたまれず、用事にかこつけて町へ出たドリス。家に帰る途中に車が故障してしまった。

折りから通りかかった車に乗せてもらえた彼女は、それが運命を変えることになるとは夢にも気がつかなかった。運が良いとおもったのもつかの間、車が家の近くを素通りしたのに気づき、不安にかられた。

■二人だけの森の生活

ハッチが彼女を連れて行ったのは、森の中にうち捨てられたような貧しい小屋。

「ザナデューの宮殿にようこそ！」

ハッチは恐怖に脅える娘をまるで王女のように、うやうやしくもてなした。そして白いシャツに着換え、伝説の王サワラクになりきって、とうとうと詩を空んじたのである。ドリスはただア然とするだけであった。

「これから君をクリスタベルと呼ぶ。君は踊る妖精だ」

ペチカの赤々と燃える火に照らされて酔ったようにしゃべりつづけるハッチ。不気味さとやさしさふてぶてしさが交錯している彼は、いったい何者なのだろうか？

■そして愛に変わった

翌日、ハッチは彼女の手を縛りつけてから日用品を買いに町へ行った。彼女に水色のドレスをプレゼントするためである。

ドリスはそれを買物の中から見つけ出したとき、これまでの恐怖や不安を忘れて踊りあがって喜こんだ。

早速着換えて美しく装っての食事は楽しいものであった。笛を吹きながら、母や少年の頃の思い出を喋る彼。ドリスは彼に誘われて踊りながら、これまで一度も味わったことのない幸せに酔っていた――。

逃げようとおもえば、いつだって逃げられる。しかし、ハッチのやさしさに気づいた今は、もう彼から離れたくなかった。

■この愛だけは誰にもわたさない

「あなたに捧げる詩を書いたのよ」

それは二人の出逢いから、愛の芽ばえをつづる詩だった。稚ない詩だが、その稚なさがハッチの心を打った。

はじめて心のふれあいを感じた二人。だが別れが迫る。小屋が夜の闇に包まれたとき、銃を手にした保安官と町の人びとが押し寄せ、森の中に異様な殺気が立ちこめた。

「逃げて！」ドリスの声はふるえた。

「泣くんじゃない。目をつぶって、星を見ているんだよ」

闇を引きさく一発の銃声が傷ついた青春を寄せ合う二人の愛を消してしまった……。